

～アンケートおよびヒアリング調査結果より～

鳥取自動車道および松江自動車道の開通（2013年）に加え、2015年には中国横断自動車道尾道松江線が全線開通することもあり、今後、山陰地域では交流人口のさらなる拡大が期待されている。もとより山陰地域は美しい自然に加え、豊かな歴史文化資源にも恵まれた地域でもあるが、こうした地域資源をいっそう磨くことで地域振興につなげようという動きが、いま各地で地道な成果をあげつつある。

本稿では、2013年にエネルギー総合研究所が中国経済連合会および（公社）中国地方総合研究センターと共同で実施した「山陰・日本海の歴史文化資源の掘り起こしとネットワーク化調査」の結果の概要を紹介するとともに、今後の山陰地域の歴史文化資源を地域活性化に活かすための課題や方策について考える。

1. はじめに

2013年3月、鳥取自動車道（佐用JCT～鳥取IC）および松江自動車道（三次東JCT・IC～宍道JCT）が全線開通し、山陰地域と瀬戸内海沿岸・京阪神地域の時間距離が一段と縮まることとなった。これを地域の発展にどう生かしていくかが、山陰地域にとっては喫緊の課題である。

観光振興の面からみると、交通網の拡充による交流人口の拡大は追い風に違いないが、他方、宿泊客の減少（日帰り客比率の上昇）や地元客の県外流出を招いてかえって観光関連収入の減少も懸念される。観光地間の競争激化にいかに対応していくか、待ったなしの対応が求められている。

さいわい山陰地域は、鳥取砂丘、大山、隠岐などといった雄大な自然とともに、「古事記」にも描かれた古代から近世にいたるまで、豊かな歴史文化資源に恵まれた地域ともいえる。

平成20（2008）年からは、出雲大社（島根県出雲市）において60年に一度の大遷宮が行われ（平成28（2016）年に終了予定）、折々の神事や本殿の公開のたびに多くの観光客が訪れて大いに盛り上がりを見せたが、山陰地域は出雲大社に限らず、歴史文化資源の宝庫である。その貴重な資源を掘り起こし、磨き直し、生かしていくことの先にこそ、観光振興の活路が見いだせるのではないか。そうした問題意識のもとで、本調査を実施した。

実際、山陰地域には貴重な歴史文化資源であるに

もかわらず、観光客や地元住民にさえその価値を十分に認知されていない歴史文化遺産、施設等が多く存在する。本調査では、そうした未活用の資源に焦点を当て、いかに観光振興・地域振興に生かしていくかを考える。

歴史文化資源の活用実態や課題を明らかにするために、山陰・日本海地域の自治体（市町村）やガイド組織に対するアンケート調査を実施したほか、すでに資源の掘り起こしや活用に取り組んでいる地域については関係者へのヒアリング調査を行った。

以下では、その調査概要を紹介したのち、今後地域が取り組むべき課題や方策を整理する。

2. 行政から見た歴史文化資源の評価（アンケート調査結果）

今回の調査では、歴史文化資源活用に関する地元自治体の認識や取り組みの様子を明らかにするために、山陰・日本海地域の42市町村に対してアンケート調査を行ったので、その結果を概観する。

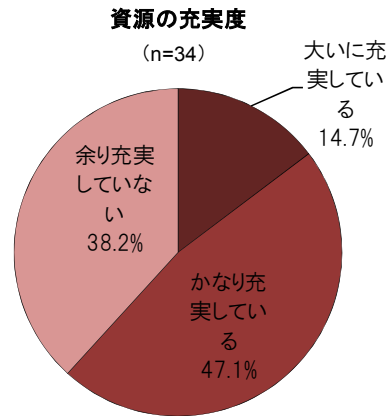
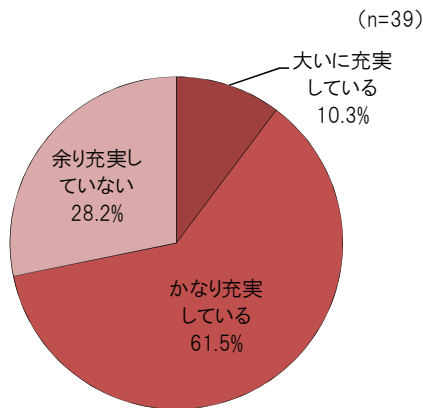
（1）主なアンケート結果

まず、地元自治体が自分たちの歴史文化資源の充実度をどう評価しているかについて尋ねたところ、「大いに充実している」が10%、「かなり充実している」が62%と、合わせて約7割が肯定的な評価を

¹ 本調査では、調査対象地域を鳥取県、島根県の全市町村および山口県の日本海に面した市町とした。

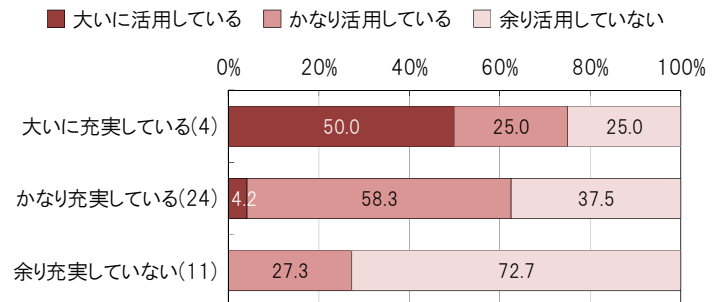
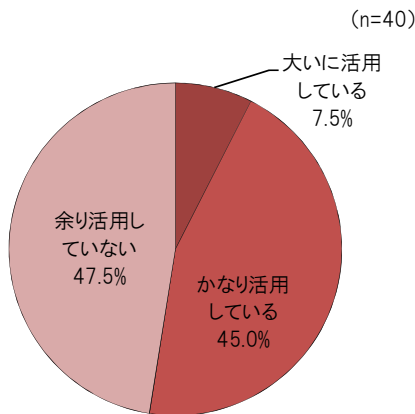
図表1 歴史文化資源の充実度

〔参考〕瀬戸内海地域（2012年調査）



図表2 歴史文化資源の活用度

図表3 歴史文化資源の活用度（充実度別）



していることが分かる（図表1）。これは、2012年に実施した瀬戸内海地域を対象とした同種の調査結果に比べ1割程度高い水準である。

一方、そうした歴史文化資源の活用度について尋ねたところ、「大いに活用している」が8%、「かなり活用している」が45%で、合わせて半数を超えているが、一方で「あまり活用していない」も半数近くあることから、活用度については肯定的評価と否定的評価に分かれているといえる（図表2）。また、資源の充実度と活用度は相関関係が見られ、資源が「大いに充実している」「かなり充実している」地域では、「大いに活用している」や「かなり活用している」という評価が多くなっている（図表3）。

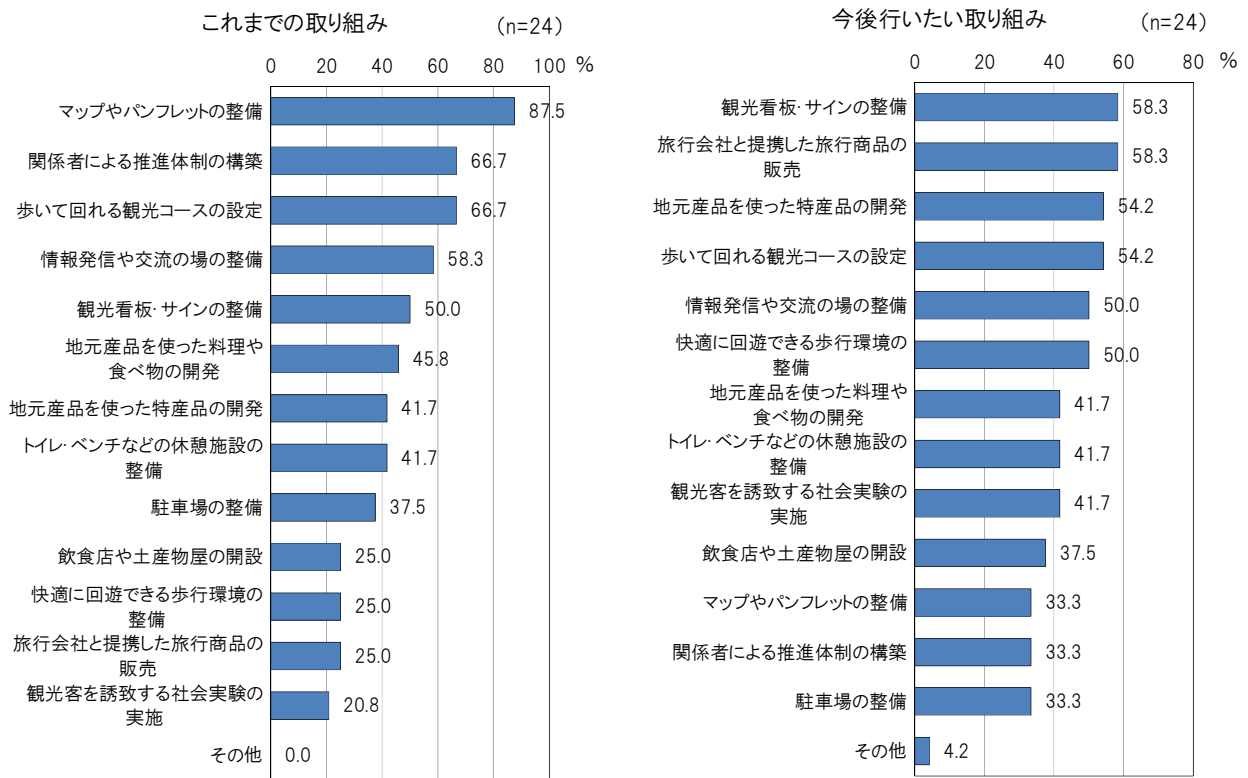
次に、現在活用されている歴史文化資源、今後更なる活用が期待される歴史文化資源を具体的に明示してもらったところ、時代区分的には古代・中世・近世・近代にわたり多彩である。2012年に実施した瀬戸内海地域の同種調査と比べると、荒神谷遺跡や神話にまつわる史跡など古代に関する歴史文化資源

が多く挙げられているのが特徴となっている。

また、資源の掘り起こし、資源磨き、観光商品開発などに取り組んでいる歴史文化資源について、具体的な取り組み内容を尋ねたところ、これまでの取り組みでは「マップやパンフレットの整備」が最も多く、情報発信に力点が置かれてきたことが分かる（図表4）。今後行いたい取り組みとしては「観光看板・サインの整備」「旅行会社と連携した旅行商品の販売」「歩いて回れる観光コースの設定」など、多様な課題が多く残されていることが認識されている。

最後に、地元のガイド組織の有無についての問いに対して、「ある」が75%と太宗を占めた。これは瀬戸内海地域における同種の調査結果とほぼ同水準である。なお、歴史文化資源の活用度と観光ガイド組織の有無には相関関係が見られ、歴史文化資源を「大いに活用している」地域ではガイド組織率は100%、「かなり活用している」地域では9割近くになっている（図表5）。

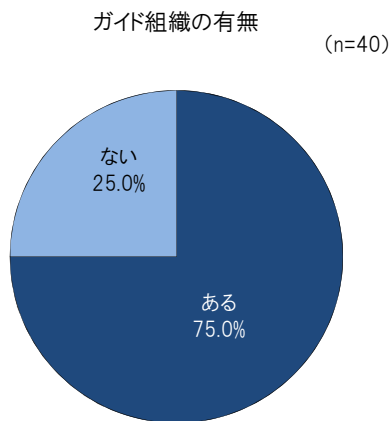
図表4 歴史文化資源を活用した取り組み



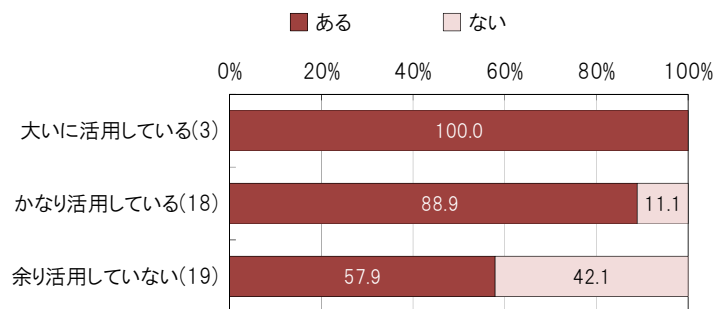
(注)複数回答

(注)複数回答

図表5 ガイド組織の有無



資源の活用度×ガイド組織の有無



(2) 結果から言えること

山陰地域は豊かな歴史文化資源を有するが、特に古代の文化資源の集積が特徴となっている。ただし、歴史文化資源をあまり活用していないと評価する地域も半数近くあり、未活用資源もいまだに多いと考えられる。

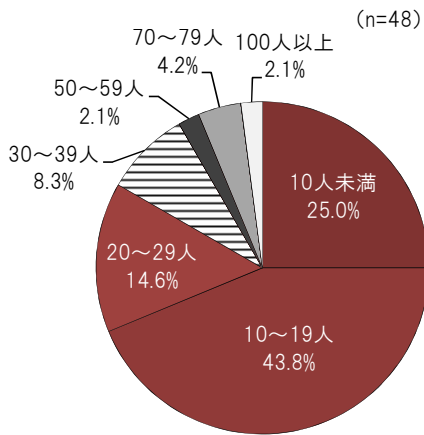
歴史文化資源を活用した観光振興策としては、従来はマップ・パンフレット等の情報発信が中心だったが、今後は観光地における看板やサインの充実などの環境整備や旅行商品の開発等、直接的な観光促進策に力点を移しているようだ。

ガイド活動は活発であると概ね肯定的に評価されており、歴史文化資源の活用度が高い地域ほどガイド活動が活発と捉えられている。

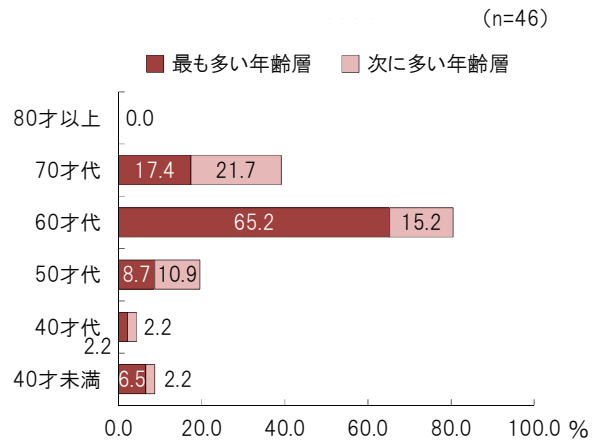
3. ガイド組織の実態と課題 (アンケート調査結果)

自然や温泉、娯楽施設などと異なり、歴史文化資源は知的な理解を伴ってはじめてその魅力を楽しむことができるという特徴をもっている。そうした意味で、歴史文化資源の活用にあたっては観光客と資

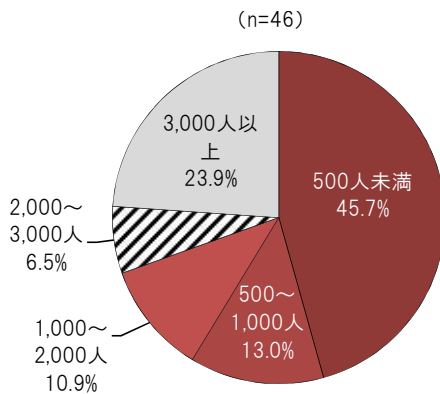
図表6 ガイド組織のメンバーの人数



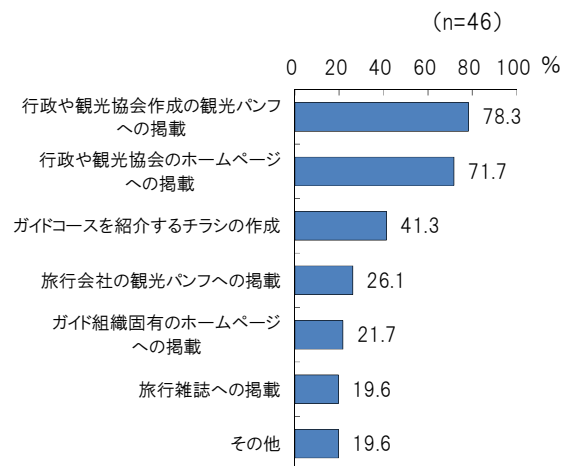
図表7 ガイド組織のメンバーの年齢層



図表8 年間のガイド受け入れ人数（観光客数）



図表9 現在行っている情報発信



源そのものを取り持つインターフェイスとしてのガイドの役割が重要となる。

そこで以下では、ガイド組織の実態と課題についてガイド組織自体に尋ねたアンケート調査結果の概要を紹介する。

(1) 主なアンケート結果

まず、ガイド組織のメンバーの人数は20人未満の組織が全体の7割近くを占め、比較的少人数で活動しているガイド組織が多い² (図表6)。

メンバーの年齢構成については、「60歳代」が中心とする組織が約65%、「70歳代」が中心とする組織が17%もあるなど、ガイド組織は60歳以上の高齢者が担っていることが分かる (図表7)。

年間の1組織あたりのガイド受け入れ人数（観光

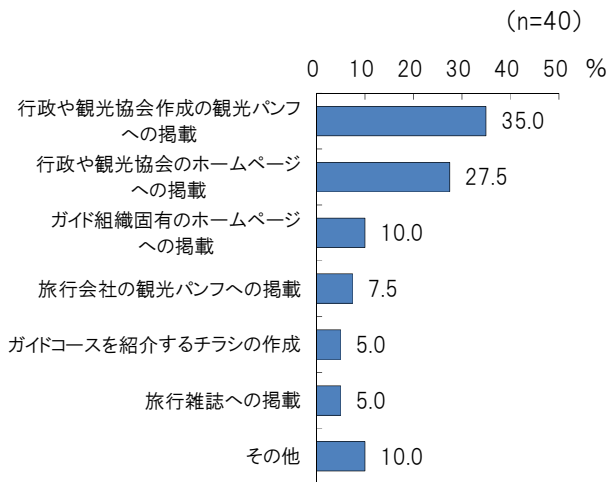
客数)については、「500人未満」が46%と最も多くなっている。一方で「3,000人以上」も24%あり、受入人数にはばらつきが見られる (図表8)。観光客を10,000人以上も受け入れている組織は4組織あり、その活動地域は石見銀山 (島根県)、萩 (山口県)、智頭 (鳥取県)、倉吉 (鳥取県) となっている。主要観光地域においては多くの観光客を案内しているガイド組織の活動があることがわかる。

ガイド組織が現在行っている情報発信としては、「行政や観光協会作成の観光パンフへの掲載」が8割近く、「行政や観光協会のホームページへの掲載」が7割強と、この2つが主となっている。「ガイドコースを紹介するチラシの作成」を行っているのは41%にとどまり、残りの約6割の組織では、ガイドコースを紹介するチラシの作成が行われていないのが現状である (図表9)。

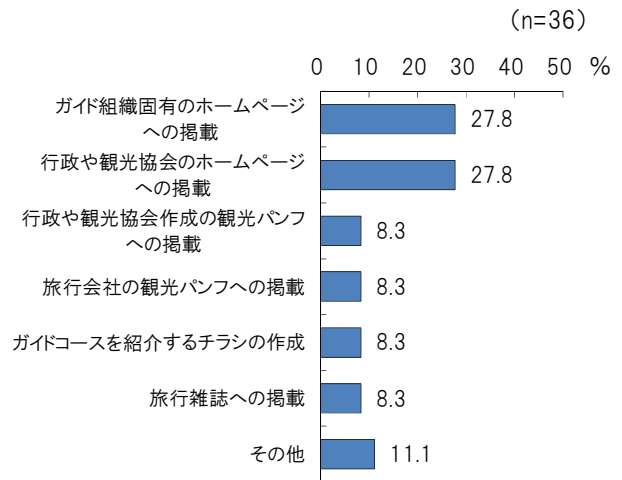
現在、最も効果的な情報発信は、「行政や観光協会の観光パンフへの掲載」が35%と多く、続いて「行

² 一方では、山口県萩市のNPO萩観光ガイド協会 (100名)、島根県大田市の石見銀山ガイドの会 (70人) などのように比較的大規模な組織もある。

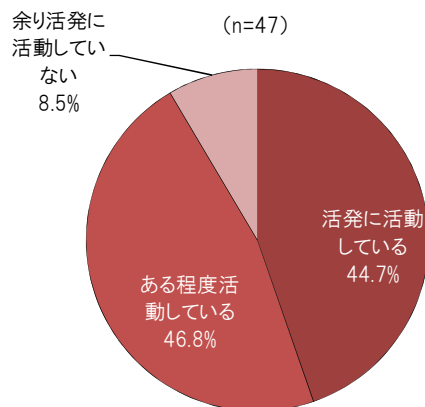
図表 10 現在最も効果的な情報発信



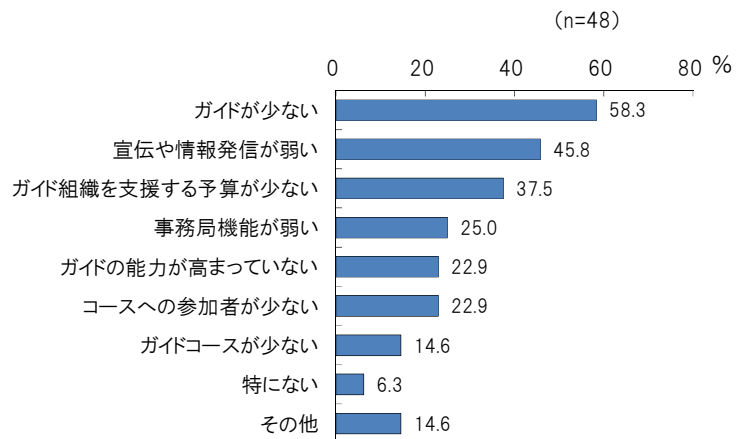
図表 11 今後強化したい情報発信



図表 12 ガイド組織の活動状況（自己評価）



図表 13 ガイド組織の問題点



行政や観光協会作成のホームページへの掲載」が28%となっている（図表10）。

今後強化したい情報発信としては、「ガイド組織固有のホームページ」と「行政や観光協会のホームページ」が同程度となっており、ホームページが重視されていることがわかる。このように情報発信については、現状では行政・観光協会依存度が強いが、今後は自らのホームページでの情報発信を重視している様子が窺える（図表11）。

ガイド組織の活動状況に関する自己評価を尋ねたところ、「あまり活発に活動していない」は9%と少なく、自己評価としては概ね肯定的な評価となっている（図表12）。

最後に、ガイド組織が抱える問題点としては、「ガイドが少ない」を挙げた組織が58%と最も多く、「宣

伝や情報発信が弱い」と「ガイド組織を支援する予算が少ない」が続き、この3つが主な問題点となっている。「ガイドコースが少ない」や「コースへの参加者が少ない」はいずれも2割以下にとどまっており、おおむね各組織の力量に応じた活動となっていることが分かる（図表13）。

（2）結果から言えること

ほとんどのガイド組織はかなり活発な活動を行っている。ただし、ガイドの大半は高齢者で、しかも人数が不足している様子が窺える。

また、ガイドツアーの情報発信は行政や観光協会のパンフレットやホームページに依存しているガイド組織が過半数を占めるなど、独自の情報発信力が弱いと考えられる。

4. 歴史文化資源の掘り起こしによる 観光振興の取り組み事例

山陰・日本海地域には、古代から近代にいたるまで豊かな歴史文化資源が残されているが、その知名度や活用度はまちまちである。全国的な知名度を誇る資源もある一方で、貴重な歴史文化資源であるにもかかわらずその価値が十分に世に知られていないものも多い。

特に後者のような資源を掘り起こし、地域の宝として磨きをかけて地域振興に役立てようという動きが徐々に広がりつつある。

以下では、このような活動を行っている地域の中から、一定の成果を上げつつある主な事例をいくつか取り上げ、取り組みの特徴などを紹介する³。

(1) 倉吉の町家と白壁土蔵群（鳥取県倉吉市） （資源の概要）

倉吉は古代から伯耆国の国府や国分寺が置かれた政治・経済・文化の中心都市であり、江戸時代には鳥取藩家老荒尾氏により陣屋が置かれていた。現在でも江戸時代後期の町家（商人の屋敷）や白壁土蔵群、昭和の戦前の銀行建物などの歴史的建造物が残っている。

この地区は、全国に106ある（2013年12月27日現在）重要伝統的建造物群保存地区⁴（以下、「重伝建」と略す）に選定されている。

（主な取り組み）

倉吉市では、白壁土蔵群の景観に対する市民の愛着が強いこともあり、以前から市の補助金を受けるなどして建物所有者が行政と共同で古い建物や街並みの修復を行ってきた。このことが、平成10（1998）年の「重伝建」指定につながり、その後も、国の重伝建支援制度を活用した修理修景事業が続けられ、平成24（2012）年度までに87棟の歴史的建造物の修理が行われた。

このようにして整備が進む白壁土蔵群を活用して実際に観光・商業振興を行う主体は、平成9（1997）



「重伝建」に選定されている倉吉市の白壁土蔵群



歴史的な町並み景観と調和した商業施設（倉吉市）

年に市、商工会議所などの出資によって設立された第三セクターの（株）赤瓦である。同社は、歴史的町並み内で土産店・飲食店などの商業施設（歴史的建造物を活用）を運営し、同地区の活性化に成果を上げつつある。店舗数は現在14店舗まで拡大している。

また、重伝建地区周辺の商業者・住民で作られた「あきない中心倉」というまちづくり団体が観光客の集客と回遊性を高める取り組み（スタンプラリー等）を実施しているほか、くらし観光・MICE協会（旧倉吉市観光協会）は、歴史文化資源を題材としたまち歩き商品を数種類開発し有料ガイドを実施するなど、さまざまな集客の取り組みが行われている。

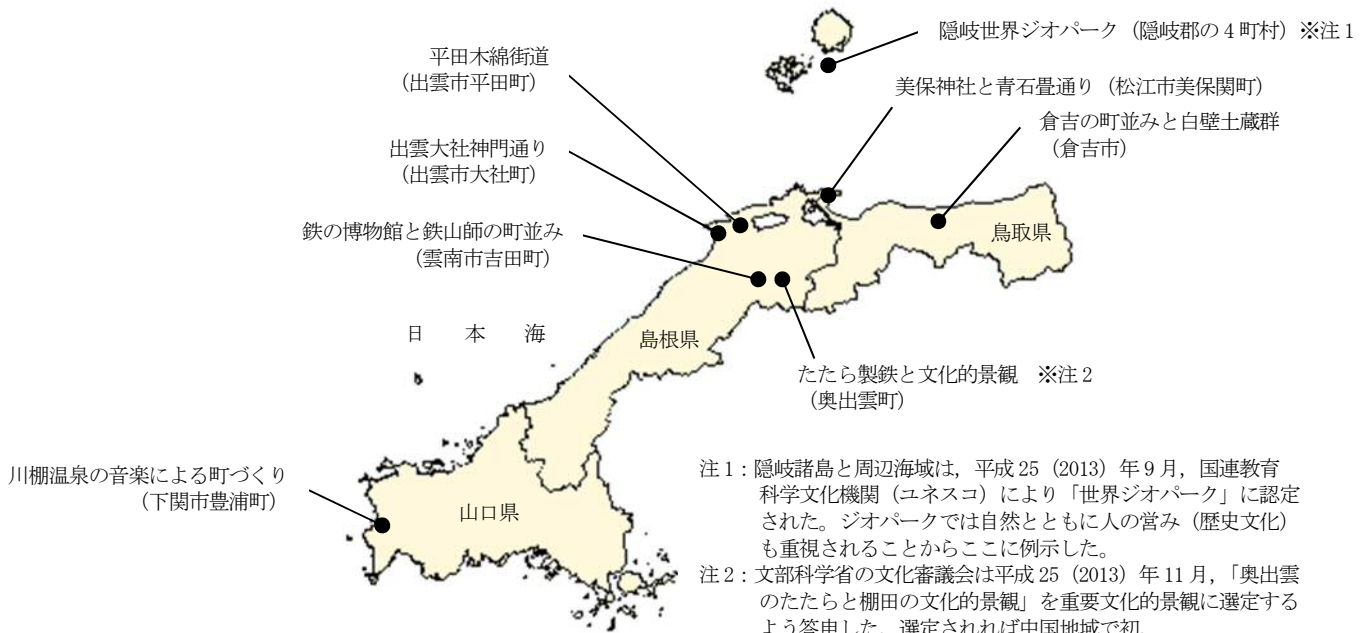
こうした歴史文化資源活用の取り組みが評価され、中国地方整備局が平成13（2001）年に創設した「夢街道ルネサンス認定地区」⁵の第1期（平成13年度）

³ 本調査では、ここで紹介する事例について関係者へのヒアリング調査および現地視察を実施した。

⁴ 市町村が都市計画や条例などで決定した伝統的建造物群保存地区のうち、特に価値が高いものとして国が選定する。文化財としての建造物を単体でなく群で保存しようとするもので、昭和50（1975）年に制定された制度。

⁵ 歴史や文化を今に伝える中国地方の街道を認定することにより、地域が主体となった個性ある地域づくりの展開を支援するもので、平成25年10月時点で36カ所が認定されている。

図表 14 歴史文化資源の掘り起こしに取り組む地域（一部の事例）



注1：隠岐諸島と周辺海域は、平成25（2013）年9月、国連教育科学文化機関（ユネスコ）により「世界ジオパーク」に認定された。ジオパークでは自然とともに人の営み（歴史文化）も重視されることからここに例示した。

注2：文部科学省の文化審議会は平成25（2013）年11月、「奥出雲のたたらと棚田の文化的景観」を重要文化的景観に選定するよう答申した。選定されれば中国地域で初。

に、「八橋往来」（伯耆国の中心であった倉吉と八橋（鳥取県琴浦町）を結ぶ奈良時代からの街道）が選ばれている。

（成果・課題）

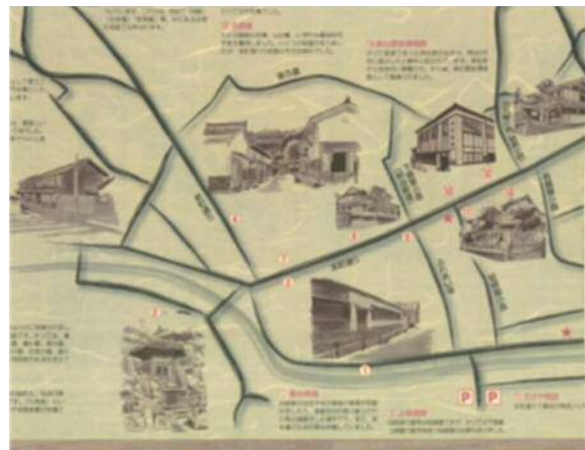
「重伝建」地区指定後は観光客が増加している。近年は三朝温泉とのセットでツアーが生まれ、来訪者は関西圏の中高齢者が多い。

一方で、住民の高齢化に伴い空き家が増加しており、町並み保存や地域活性化、安全対策の面で支障が出始めている。

（2）鉄の博物館と鉄山師の町並み（鳥根県雲南市）

（資源の概要）

中国山地は良質の砂鉄と豊富な森林資源に恵まれていたことから、古来より「たたら製鉄」⁶が盛んに行われ、中でも奥出雲地方で生産される鉄は質、量とも群を抜いていた。雲南市吉田町（旧吉田村）には、鉄師御三家⁷のうち山林王として知られた田部



鉄にまつわる歴史文化資源に磨きをかける雲南市吉田町の案内マップ

資料：鉄の歴史村交流推進会議発行パンフレットより

家が経営する菅谷たたらがあり、ここで生産される出雲鋼は品質が優れていたため安来の港から全国に移出され、江戸時代には松江藩の有力な財源となっていた。

このように製鉄の町として栄えた雲南市吉田町内には、日本に現存する唯一の高殿⁸（重要有形民俗文化財）が残る「菅谷たたら山内」⁹を中心に鉄の歴史博物館、鉄の未来科学館、山内生活伝承館が整備されている。また、町の中心部には、かつて田部家の繁栄とともに栄えた伝統的な街並みが残されており、往時の面影を現在に伝えている。

⁶ 粘土製の炉内で原料の砂鉄を木炭と燃焼させ、砂鉄中の不純物を還元分離（精錬）し、鉄（銑鉄と鋼）を得る古式製鉄法。始まりは古墳時代後期から弥生時代と考えられている。吉田町でたたら製鉄が始まったのは鎌倉時代といわれており、江戸時代の藩政期には松江藩が全国の7～8割を生産していた。

⁷ 江戸時代に松江藩から砂鉄採取、木炭用材伐採の許可を得た者をいう。その中心的存在であったのが田部家（雲南市）、櫻井家（奥出雲町）、糸原家（奥出雲町）の三家であった。

⁸ たたら製鉄を行う炉やふいごを含めた建物全体のこと。

⁹ たたら製鉄に従事していた人々の仕事場や居住地区の総称。



松江藩鉄師頭取であった田部家の住居を中心に鉄の歴史博物館など歴史的町並みが残る吉田町の本通り

(主な取り組み)

雲南市吉田町は旧吉田村の時代から、鉄とともに歩んできた風土と歴史、そして文化遺産を正しく保存し公開するために、吉田村全体を「鉄の博物館」にしようとする構想に基づいて、昭和 61(1986)年 3 月に「鉄の歴史村宣言」を行った。

この方針に沿って整備された「鉄の歴史博物館」、
「鉄の未来科学館」、および「山内生活伝承館」は(公財)鉄の歴史村地域振興事業団によって運営されている。また、同財団はたたら製鉄の実演や体験イベントを実施している。中でも、年 1 回行われる「近代だたら操業体験」は 4 泊 5 日の日程で、炉づくりから鋼の取り出しまでの一連の作業を実体験する本格的なプログラムとなっており、初心者から製鉄関係者まで毎年全国から多くの参加者を集めている。

このほか、第三セクターの(株)吉田ふるさと村は地元農産品の加工・販売を手掛けるほか、第三種旅行業の免許を取得してたたら関連の歴史文化資源(近隣市町を含む)を巡る周遊ツアーを企画・販売する計画である。また、同社が平成 14(2002)年から販売している卵かけご飯専用醤油「おたまはん」は好評を博しヒット商品の一つとなっている。

(成果・課題)

こうした取り組みの結果、近年、近隣地域で認知度が高まっている。近くを走る松江自動車道の全線開通も追い風になっているが、この利点を生かして観光客をいかにこの地域に呼び込むかが今後の課題である。また、街並みが保存されている地区でも空き家が増加しており、対応(活用)を迫られている。

(3) 美保神社と青石畳通り (島根県松江市)

(資源の概要)

島根半島の東端に位置する美保関(松江市美保関町)は、古くから海運の拠点として重要な位置にあり、江戸時代には北前船の寄港地として繁栄した港町で、嘉永 3(1850)年には 42 軒もの廻船問屋があった。

現在に残る「青石畳通り」は、同町の佛谷寺から美保神社までの参道で、江戸時代後期に積み荷を運ぶために海中から切り出した青石¹⁰や北前船にバラストとして積まれていた越前笏谷石¹¹などが幅約 3 メートル、長さ約 250 メートルにわたって敷き詰められている。

近くにある美保関港に寄港する北前船に積荷を乗せるため、通りを往復する大八車のために固い道路が必要となり、住民が結束して石畳にしたもので完成に 100 年を要したと言われている。固くて濡れても滑りにくい上に、水を吸って一層青みを帯びる石畳の道と、古い街並みが落ち着いた雰囲気醸成しており、平成 18(2006)年に水産庁の「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に認定され、平成 19(2007)年に「夢街道ルネサンス認定地区」に選定されている。



北前船の寄港地として繁栄した江戸時代の石畳が今も残る美保関町の青石畳通り

(主な取り組み)

地域住民が大学生・研究者(東京工業大学)の協力を得ながら街づくりに取り組んできた。下水道整備のため石畳をコンクリートに変更する計画が持ち上がったときも、住民が石畳の保存に努めた。

¹⁰ 美保関周辺の海岸で採れる緑色凝灰岩。

¹¹ 福井市足羽山の笏谷地区で採掘される火山礫凝灰岩で、きめ細やかでやや青みを帯びた色合いから「越前青石」とも言われる。

ソフト面では、ハンディな「街あるきマップ」を作成して情報発信を行っているほか、定時の有料ガイドツアー（佛谷寺～青石畳通り～美保神社を1時間で散策）を実施している。また、美保神社で明治初頭以降途絶えていた「歌舞音曲奉納」を平成4（1992）年に復活させて一流の演奏家による奉納演奏を行っている。

ハード面では、青石畳通りからややはずれた築150年の空き家を漁村体験宿泊施設「橋津屋」として改修・再生したほか、その隣接地にかつて小泉八雲が宿泊した「島屋」があったことから（現在、建物は無い）「小泉八雲記念公園」として整備し、観光客の回遊しやすい環境を整えつつある。

（成果・課題）

歴史に興味のある来訪者の間では「青石畳通り」の評価は高い。ただし、来訪者数は近隣の観光地である美保関灯台や水木しげるロードに比べてきわめて少ない。また、飲食店や買い物施設が少なく、休憩できるベンチも少ないなど、回遊環境はまだ十分とはいえない。

（4）平田木綿街道（島根県出雲市）

（資源の概要）

出雲市平田町（旧平田市）は、江戸時代から明治にかけて雲州木綿を取引する市場町として発達した。江戸時代の中期から後期に行われた斐伊川の川違えによる新田開発（川の流れを変え、斐伊川の沖積を利用した土地開発）とともに木綿の栽培が盛んとなり、木綿関連産業が隆盛したのが始まりである。

雲州木綿は松江藩の重要な産品として広く取引され、平田船川から宍道湖・松江を経由し海路で大阪

へ運ばれていた。平田船川沿いには「かけだし」と呼ばれる川面に下りる階段があり、運河の町としての歴史を物語っている。その後の都市開発によりかつての町並みの大部分は消滅したが、開発から取り残された市街地北部の東西約300メートル、東端から北へ約200メートルの木綿街道には、「切妻・妻入り塗り家造り」という雲州平田特有の酒蔵・醤油製造販売などの町家が並び、昔の面影が残る。

（主な取り組み）

地域活性化を目的に木綿街道の商店主や地域住民で組織された「木綿街道振興会」（平成16（2004）年設立）が毎年1回（5月下旬）「おちらと木綿街道」というイベントを開催し、約6,000～7,000人の入込客を集めている。イベント当日は街道が歩行者天国になり、各所で食べ物・飲み物の提供やフリーマーケット、音楽ライブ、パフォーマンスなどが繰り広げられる。平成13（2001）年に始まったこのイベントは、「平田木綿街道」の活動の原点となったもので「木綿街道」の名前もこのイベント名に由来する。

また、毎年2月（節分）には、木綿街道内でついた小さな餅を椀に入れ、街道沿いの酒蔵や醤油蔵に持っていきと店ごとに工夫を凝らしたトッピングをしてもらえるという「もち街木綿街道」というイベントが開かれ、約5,000人の集客がある。こうしたイベントは地域住民同士あるいは住民と観光客の触れ合いの場となっており、同時に地元商店街の売り上げ増加にも貢献している。

このほか、「ひらた中高年まちづくり企業組合」（平成17（2005）年設立）が水上遊覧船「平田舟」を3月～11月の毎週土曜日・日曜日に運航したり、「木綿街道町並みガイドの会」が、予約制の有料観光ガイドを行っている。



木綿関連産業で栄えた江戸時代の建物が残る平田木綿街道の散策マップ

資料：木綿街道ホームページより



切妻・妻入り塗り家造りの伝統的建造物群（出雲市平田町）

(成果・課題)

沿道のシンボリックな建物である「旧石橋酒造」で活用実験が行われた3年間で延べ約4万人の来場者があるなど、取り組みは一定の成果を上げている。ただ、活動の継続には町並み保存の必要性に関する地元の理解度を一層高めていく必要がある。また、観光拠点でもある「旧石橋酒造」が防災基準を満たしていないこと等から集客イベントの開催が困難となっており、今後の活用方策が課題である。空き家や空き店舗も目立っており、有効活用が求められる。

(5) 出雲大社神門通り (島根県出雲市)

(資源の概要)

「神門通り」は出雲大社への参詣道として、国鉄



出雲大社前交差点側から見る神門通り。人通りの多い交差点近くは歩道が広くなり、店舗もセットバックしたため、従前より歩行者空間が広がっている。



大社線の開通にあわせ、約100年前に整備された。多くの参拝者がこの参道を通して出雲大社にお参りしたことから、門前町として栄えた。

大鳥居と参道の両側に立ち並ぶ松並木が、独特の景観を形づくっている。

大正期から賑わった「神門通り」であったが、やがてモータリゼーションの波が押し寄せると、参拝者が出雲大社に近い駐車場を利用するようになったために「神門通り」は主要な参詣ルートからはずれ、歩行者の数も次第に減少し、門前町としての賑わいを失っていった。平成2(1990)年には通りに面したJR大社駅と出雲市駅を結ぶ大社線も廃線となる。

(主な取り組み)

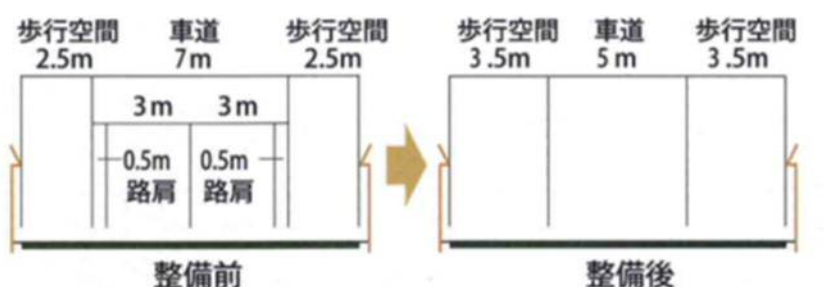
出雲大社の平成の大遷宮を契機に、島根県と出雲市が地元住民の意見を反映しつつ公共事業として「神門通り」の「修景整備」を行った(平成23~25(2011~13)年)。具体的には、従前のアスファルト舗装道路から石畳に変更し、それと調和する照明や看板を新設した。また、歩行空間を従来の2.5メートルから3.5メートルに拡幅し、車道との段差をなくすことで歩行者がゆったりと歩けるように工夫するなどして、回遊環境を向上させた。

あわせて「神門通り」沿いに新たに2カ所の無料駐車場(計250台)を整備したほか、観光案内所「おもてなしステーション」を整備した。

一方、地元住民や商業者の間では、この機会に自



従前は、歩道が松並木より店舗側だけだったが、歩道を拡幅することで両側に歩行者が通れる空間が確保された。



らの手で「神門通り」のかつての賑わいを取り戻そうという機運が高まり、沿道商業者による活性化組織「神門通り麴りの会」が、空き店舗活用等の活性化策に熱心に取り組むなど、ソフト面での取り組みも進んだ。沿道の店舗が日除け暖簾を設置することで統一的な景観形成に成功した(平成24年度しまね景観賞を受賞)ほか、「ぜんざい発祥の地」を積極的にアピールし、ぜんざいによる町興しに取り組んでいる。また、チラシやインターネットによる情報発信に努め、アンケートに回答すればクーポンと引き換えるなどの工夫をして観光客の消費拡大を図る取り組みにも力を入れている。

(成果・課題)

こうした取り組みの結果、神門通りの通行者数は平成22(2010)年に最大で約1万人/日だったものが、平成25(2013)年のゴールデンウィークには3.5万人/日に増加している。また、沿道の店舗数が従前の約20店舗から約70店舗にまで増加したことで賑わいの形成に大きな効果をもたらした。

一方で、車の渋滞が新たな問題となっているほか、飲食店の不足、閉店時間が早い、トイレやゴミ箱が少ないなどの観光客の苦情もあり、受け入れ体制がまだ十分といえない部分も見受けられる。

平成の大遷宮の一連の神事等が終了した後もいかに客足を維持するか、創意・工夫が求められる。

(6) 事例調査から言えること

先進事例調査を行った地区では、いずれも地元の住民や商業者が地域の歴史文化資源の価値を認識し、愛着や誇りを持って主体的に資源の磨き上げや活用に取り組んでいる姿が見受けられた。

歴史文化資源の保存や磨き上げに熱心な地域では、しばしばその資源をテーマとしたイベントが機運盛り上げの契機となってきたようだ。また、歴史的な町並み歩きを楽しむためのマップや各種のパンフレット、ウェブサイトなどが整備され、歴史文化資源の価値を広く発信している地域が多い。

ガイド組織はどこも活発に活動しているが、その体制の充実度には地域間でかなりの格差がある。また、歴史的な建造物をうまく商業的に活用する民間組織があるかどうか、賑わいを生み出し、地域振興(商業振興等)につなげる上でポイントとなっているようだ。

ハード面では、歴史的な町並みを楽しむ人々のた

めの看板・サイン・駐車場などの整備が進んでいる。行政の支援を受けて大がかりな景観の維持・補修や回遊環境の向上のための道路整備などを行った地域もあった。

こうした取り組みの成果として、集客面では「神門通り」のように目覚ましい集客アップを見た地域もある半面、必ずしも十分な集客力の向上につながっていないところが多い。たとえば、出雲大社に近い「平田木綿街道」、水木しげるロードに近い「青石畳通り」などは、集客力の強い観光地に近接しながらも、認知度が低いことなどから観光客を十分に誘導できていない。

またせっかく訪れてきた観光客を長く引き留めるための休憩施設や飲食店、物品販売施設などが不十分で、観光消費をうながす仕組みが不十分なところも多い。

さらに、地方都市共通の課題ではあるが、歴史のある町並みでも空き家が目立ち、景観の保全や観光振興の妨げとなっている地区も多い。

5. 今後の課題と方策

以上のようなアンケート調査結果や取り組み事例の現地調査などから、最後に、歴史文化資源の掘り起こしと活用に係る取り組み上の主な課題を抽出し、それに対する今後の取り組みの方向性を整理した。

(1) 主な課題

① 歴史文化資源の活用度

自地域の歴史文化資源は充実していると評価する市町村が大勢を占めるなかで、資源を活用していると考える市町村は半数程度にとどまっている。せっかくの貴重な歴史文化資源でありながら、十分に生かされていないものが依然として多く残されている。

② 周遊性

歴史文化資源の掘り起こしと活用に取り組んでいる地域の多くで、近隣に比較的集客力のある観光資源がありながら、そこから観光客を誘導することが十分にできていない。素通りしている観光客を周遊させる仕組みがないか、あってもうまく機能していない。

③ 受け入れ環境

道路の修景整備など回遊環境の整備は、各地で進

められてきたが、沿道のギャラリーやベンチの設置などはまだ不十分なところが多い。また、飲食や買い物といった観光客の基本的なニーズに十分に配慮されていないところが少なくない。

④空き家問題

地方都市共通の課題であるが、歴史文化資源の活用を進めている地区でも、空き家の目立つところが多く、町並みの維持や賑わいづくりの妨げになっている。

⑤ガイド活動

歴史文化資源を活用した観光振興には、ガイドの役割が重要になるが、山陰地域ではガイドの人数が十分でないガイド組織が多い。また、ツアーコースを紹介する独自のパンフレットを持たないガイド組織が6割に上り、情報発信体制も十分とはいえない。

(2) 観光振興に向けての主な方策

①地道な歴史文化資源の掘り起こし

歴史文化資源は地域にとってかけがえのない「資産」「宝」であると再認識することが重要である。地元の歴史文化資源を掘り起こし、それを磨いていくことは、単に地域の産業振興・観光振興につながるだけでなく、「地域の誇り」を再発見・再構築していく取り組みともなる。

取り組みに当たっては、地域住民の「理解」「熱意」「愛着」に基づく自発的な活動をベースとしつつ、同時に、外部の有識者（大学の研究者等）のサポートを求めていくことも有益である。

②来訪者を受け入れる総合的な環境整備

歴史文化資源を掘り起こし、磨き、継続的に観光客を受け入れるためには、ハード・ソフト両面での総合的な環境整備を引き続き進めていく必要がある。

ハード面では、観光案内拠点や観光案内所の整備、歩行者に配慮した道路整備、案内看板、駐車場の充実などが重要である。また、空き家が目立つ地域では、飲食店や商業施設としての活用などの対応が求められるよう。

一方、ソフト面では、パンフレットなどの情報発信ツールの充実によるPR強化や、特徴あるイベントの開催、ストーリー性のある料理、食べ物、特産品づくりなど、企画面での創意・工夫が欠かせない。

③商業振興に向けた民間活力の活用

歴史的文化資源を生かしつつ商業的な振興を図っていくためには、店舗経営などのビジネスのノウハウを有する民間企業・個人の力を活用することが重要である。

とりわけ、集客力のあるイベントを企画・開催したり、歴史的建造物と共存する形で商業施設や飲食店など整備し運営するような場面では、創意あふれる民間活力が欠かせない。

④ガイドサービスの充実と人材育成

歴史文化資源の魅力を楽しむにはガイドによる解説や情報提供がきわめて重要である。ガイドの絶対数が不足している地域では、ガイドが無理なく活動を継続できる環境を整えることなどにより、ガイドの増員を図る必要がある。そのためには、後継者などの人材育成が不可欠であり、行政や観光協会などの支援体制も充実が求められよう。

また、ガイドマップ作成など観光客向けサービスの一層の充実も重要である。

⑤歴史文化資源間の連携・周遊化

歴史や文化に興味・関心を持って訪れる観光客にとって、つながりのある歴史文化資源を連続して訪ねることは、旅の魅力を一層高めることになる。つながり方は、地理的な近接性であったり、あるいは共通のテーマであったりするが、いずれせよ、こうした資源間の連携や周遊化によって、より多くの観光客を呼び寄せる試みが重要である。また、こうした連携・周遊化によって、比較的認知度の低い資源の集客力を高めていくことも可能となる。

(参考)「山陰・日本海歴史文化回廊」の発行について

本調査とあわせて、山陰・日本海地域の歴史文化資源を豊富な写真でビジュアルに紹介し、わかりやすく解説した冊子「山陰・日本海歴史文化回廊」（編集・発行：中国経済連合会）を作成・発行したので、ご活用いただきたい。

1999年に発行した同名の冊子を最新の情報に基づき15年ぶりに全面改訂したもので、藤岡大拙氏（NPO 法人出雲学研究所理事長）の監修のもと、時代区分に沿って24のテーマごとに各分野の専門家が執筆している。

お問い合わせ先：中国経済連合会
（電話）082-242-4511（代表）

経営調査担当 森岡 隆司